おわりに

真宗談義本の特徴として、正保年間から明治までの長い間にわたり出版されていたこと、また京都を中心に出版され、仏書を専門に扱う書肆以外にも様々な書肆が出版に関わっていたこと、それに伴う版権の移動が多く見られることが挙げられる。このことから、当時は多くの真宗談義本が出版されていたであろうと思われ、その役割である一般民衆への教化を促すという目的も、十分に果たされていたのではなかろうか。

しかし、調査した版本の刊記には、無刊記のものや刊年だけのもの、または書肆だけのものが多くあり、その全てを把握できなかった。書肆についても同様に、その何人かは詳細を知りうることができなかった。また今回、研究のために調査した真宗談義本版本はその一端に過ぎず、全てを網羅できていない。さらに調査を行えば、今回とは異なる結果が導き出されるかもしれないが、これらのことは今後の課題として受けとめなければならない。

『夜の寝覚』における天人降下事件とその機能

松田美由貴

目次

はじめに
第一章　天人降下事件にまつわる「こと」
　第一節　「夢」という「存在」
　第二節　「夢」という場
　第三節　「恥づかし」という意識
　第四節　解かれない「言」
　第五節　危うい判断力
　第六節　心を乱す「琴」
第二章　伝達されない事・言・琴
　第一節　女君をめぐる〈関係性〉と〈人間関係〉
　第二節　奪われる天人降下事件
おわりに

本稿は、『夜の寝覚』における天人降下事件が、女君によってどのように位置付けられ、機能していくのかを探ろうとするものである。従来、天人降下の際に行われた予言は、物語の構想・主題と深く関連するものとして重視されており、〝叶うもの〟だと理解されてきた。勿論天人降下事件は物語全体に影響を与える力を持った事件だといえるし、本稿はその点について異論を唱えるものではない。

私の疑問は、果して女君の悩み続ける宿世は第二の予言から派生したものなのだろうかという点にある。天人降下事件は女君の夢の中で起こった「こと」であり、女君以外誰もこの事件を知る術を持たない。それは女君自身が天人降下事件を語ることを「はづかし」と思い、隠していたからであり、それゆえ予言は解かれることのない夢として存在し続けなければならなかった。

第一章では女君がどのように天人降下事件を捉えているのかを、「事（出来事）」「言（天人のことば）」「琴（楽才）」の視点から考察し、そこから天人降下事件を構成する要素が女君という個に与える影響を明らかにする。また、第二章では三つの視点の共通項である〝伝達されない〟という事実を通して、天人降下事件全体が物語に及ぼす機能を追究する。

第一章　天人降下事件にまつわる「こと」

第一節～第三節では、「事（出来事）」という視点から考察する。まず、物語の中で天人はどのように描かれているのか、また、その非現実性を検証する。女君は、天人が琵琶の秘曲を「教ふるを、いとうれし」と感じていた。そして、三回目を待っていたということは二回目の予言である「いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世」も女君にとって受け入れ可能な発言であり、この時点では予言及び降下は女君にとって歓迎すべきものだったのである。天人が降下したという夢が女君に付加価値を与えたのは言うまでもない。その事実は、一般化できない女君の特異な生を証明したのである。降下事件は女君にとっては「現実」と連動した、確かに起こった「事（＝存在）」なのだということが確認できた。

次に、実際の「夢」である天人降下事件と、比喩として「夢」とされる事件を比較して考察を行った。そして、何故夢を語らなかったのか、天人の予言との関連性の中から検証する。女君は、自分にとって不本意な事件を「夢」と定義する。それは、認識の巧みな置き換えであったのだ。女君は現実に起こった事件を「夢」と規定し、切り捨てようとするのである。自分の身の上が、どれ一つ現実の手応えがない、そんな現実の自分の嘆きを、「夢」という場、概念によってこの世の外へと転じようと試みたが、しかしそうしても悲しみは払拭されず現世に生きる女君の身にとどまるのである。天人降下事件はつらい現実よりも現実らしい出来事なのだということが確認できた。また、天人のことばを女君は自身の将来に関わる重要な事項だとは捉えていなかった。女君が夢を解かずにいると、外側の「もののさとし」が次第に不幸へと導いたのだと考えられる。

女君自身は「存在」した「事」としているにも関わらず、父・入道や姉・大君に夢の出来事を話そうとはしない。天人降下事件を語り続けない理由は、「恥づかし」という感覚にある。そこで天人降下事件にまつわる「恥づかし」の意識について考察する。事件は誰にも話されないからこそ、女君の解釈だけに留まり、女君以外誰も知らない出来事として存在しなければならない。天人降下事件とい

う非現実的な現象が中の君の理想性を高めるとともに、信じ切れていない女君、孤立する女君を浮き彫りにする様相を見て取れた。

第四節・第五節では、「言（天人のことば）」という視点から考察した。天人のことばは、「予言」だったのか。その内実を女君の、自分自身に対する意識から考察した。女君の中には、現在の自分を厭う意識がある。なるはずだった自分と実際の自分との〈断層意識〉、それが女君に〈現在の自分〉の原因を追究せざるを得ない状況に追い込んだ。つまり女君は〈現在の自分〉を営む〈歴史的な存在〉として天人降下事件を捉えていることがわかる。同時に〈未来の自分〉を位置付けるものとしても読み替えているのである。このように現在及び未来の自分を理解するための「対象」と化すことによって天人降下事件は「機能」としての意義を求められているのだ。しかしそれはあくまで自己欺瞞であり、天人予言＝絶対的なものとし、未来の自分の可能性すら閉ざしてしまうのは〈未来の自分〉に対する自己防衛以上のものではない。女君が自分を保つために必要な転換だったのであるということが明らかになった。

悩み続ける現在は天人の予言が叶ったからなのだと定位する女君の述懐は、果たしてその言葉通り捉えて良いのか検証した。女君は、実際は思い出があるにも関わらず、京を「思い出なき古里」と定義付ける。女君は「知りたい」という欲求を持ちつつも、一人で想像し、判断し、結論付けてしまうのである。天人降下事件を再構成し、意義を特定しようとする時、盲点化される女君の判断力が、そこには確かに存在する。女君の解釈は、公正な判断ではなく、女君の感覚に基づいた判断なのだといえることが確認できた。

第六節では、「琴（楽才）」の視点から考察した。女君が弾く楽器として、箏の琴と琵琶の二種類がある。本節では琵琶と箏の琴が持つ役割について考察を進める。天人や、苦悩の根源である男君を呼び寄せたのは常に箏の琴の音であった。そのような魔力を持つ箏の琴は、それでも女君の心を癒す、過去を慕う際には欠かせない楽器である。心を開放できる楽器は箏の琴であり、しかし女君が奏すると必ず聞く人が存在することから、心の解放が解決不能の無理難題（「悩みたまふ宿世」）をつきつける結果となってしまうのである。次に琵琶の音を宮の中将に聴かれたことでもたらされた人々の感情に注目した。宮中将は、楽の音を帝に伝える運搬者（媒体）であったはずである。しかし、ただの運搬者ではなく、女君を悩ませる男の一人として帝の心のみならず、自身の心をも乱してしまう。その結果、宮の中将は女君と間違えて、故関白の次女を盗み出してしまうという、次女の嘆きの心を導いてしまう。琵琶を奏すること、それは女君自身の心というよりむしろ、「周りの人物」の心を「乱す」楽器として機能していることが確認できた。

第二章　伝達されない事・言・琴

前章では夢の出来事を三つの「こと」という視点から論じてきたが、これらの共通項は、〝伝達されない〟という事実である。第一

節では、天人降下事件が伝達されないことによって左衛門督、宰相中将、大君、女君の四人兄妹の関係性の上に成り立つ対人関係の問題が、一体どう動かされていくのか、考察を加えた。女君は「語らない」ことで誰とも対話をしない。それは、女君の願いである人間関係の修復は、行われることはないという事実を露呈させる。対話しないからこそ類推に類推を重ねざるを得ず、大君は隔てを感じ、疑念が次第に「心癖」へと変わってしまうのである。予言への気づきは、女君がその生活の「場」で、家族や天人との関わりをその地位と役割それ自体の「機能」としてしか持てなかった、あるいは持とうとしなかったことにおいて生じる「関係性との矛盾」への気づきだったのだといってもよいだろう。女君を隔てるのは予言の絶対的・超自然的な力ではなく、彼女自身の対話をしない、周りを排除する意識なのだということが確認できた。

第二節では、天人降下事件の出来事・予言・楽才を通して、天人が示したものが様々な人によって先取りされ、置き換えられ、効力を奪われていく様を考察した。それは、入内要請を断る入道であったり、男君との逢瀬を許す宰相中将であったり、天人降下事件がもたらした月影（かぐや姫）のイメージを、〈ふす女〉に置き換える男君であったりした。そして最後には「天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」とすることで、女君自身が天人降下事件を意義付け、心を乱す宿世以外の予言を、まるで無かったかのように奪い、喪失させていく姿が明らかになった。

おわりに

天人降下事件は女君の夢の中で起こった出来事であり、先行研究では女君の宿世と予言の実現に重きを置いたため、どうしても第二の予言に比重が掛かりすぎていた。しかし予言の内容は予言以外の設定（冒頭や陰陽師のことば）に求められるにも関わらず、予言を予言（＝絶対的な力）としたのは女君の〈理想の自分〉と〈現実の自分〉との〈断層意識〉から派生した再認識の結果であり、事件は救済を求めなければならない女君の弱さを露呈させることとなった。それこそが天人降下事件の機能だったといえよう。事件に対する女君の意識「恥づかし」による〈関係性〉の忘却が家族間の対話を喪失させ、対人関係に種々の歪みを作り出し、女君は自ら周囲から隔てられる存在となった。天人の予言である「悩みたまふ宿世」は、女君が自ら選び取った結果だったのである。